

【論文】

江戸幕府「五役」の人員補充 —部屋住御雇と公儀人足を事例に—

田 原 昇*

目 次

はじめに

1. 「五役」の家格と譜代

- (1) 「五役」の地位と跡式の特徴
- (2) 抱席御家人の跡式
- (3) 中間の跡式

2. 小人による「無足部屋住」の「御雇」

- (1) 「御人少」と部屋住「御雇」
- (2) 幕府によるその他の「御雇」

3. 「五役」による公儀人足の「御断」

- (1) 黒鋏之者による「御作事人足」の「御断」
- (2) 下三奉行と公儀人足請負町人

4. 旗本の「御雇」

- (1) 木村芥舟の懐旧談
- (2) 「御供御雇」と使番

おわりに

キーワード 五役 中間 小人 黒鋏之者 掃除之者 駕籠之者

はじめに

江戸城内には将軍や大名、旗本など歴々が活動しやすいよう、さまざまな庶務・雑用を担っていた「五役」と総称される下級の御家人がいた。この「五役」とは、目付支配の五つの役職（中間・小人・黒鋏之者・掃除之者¹⁾・駕籠之者）に属する者たちで、江戸城の内外で主に番衛・御使・土木・清掃・運搬を担当していた。彼らは、下働きらしく最下層の幕臣に位置しながらも、庶務・雑用という職務上、城内の随所に立ち入ることができ、その様子を巨細に知り得る

*東京都江戸東京博物館専門研究員

立場にあった。よって幕府は、彼ら五役の家格をその他大多数の御家人のように“一代抱”とはせず旗本などと同じく“譜代”とし、五役の家筋を身分的に保護・拘束する。²⁾このため五役の人数はほぼ固定的（約1800人）となり、抱席（一代抱）である多くの御家人役が「増人抱入」（臨時増員）・「仮抱入」（一時増員）・「無足見習」（無給訓練生）など、さまざまな抱入の名目で増員を計る中、譜代である五役は増員自体が難しかった。³⁾

しかし江戸城内では、平時・臨時を問わずさまざまな庶務・雑用が生じていたはずで、それを処理するには、約1800人という、旗本の3分1くらい的人数では手不足であった。事実、日常業務の中で、五役が手不足に悩む姿が史料の端々にうかがえる。⁴⁾こうした中、五役が手不足に対処するため「御雇」という制度を利用して各役職の間で人数を御雇し合い、手不足を補っていた様子についてはあまり知られていない。

そこで本報告では、五役による御雇制を中心に、江戸城内の下働きであった五役の者たちによる手不足人数の調達方法について明らかにしたい。合わせて、五役だけではなく旗本や他の御家人の役職においても、時に応じて手不足となり、その対処方法として御雇制を利用していた実態についてもふれる。これによって幕府が手不足の中、御雇などさまざまな人数調達の方法を工夫し、結果的に柔軟な人員配置・補充を可能とっていた様子について言及する。あわせて、町方人足など幕臣以外的人数による人員補充についても取りあげ、江戸城全体における人員確保の様相についても考察したい。⁵⁾

1. 「五役」の家格と譜代

五役による人数調達方法の特徴を語る場合、彼らの家格が譜代であり、人数が比較的固定的であった点が重要な要因となってくる。そこで本章では、御雇制の検討に先立ち、五役の者の家格、とくに譜代としての跡式の特徴について述べておきたい。

(1) 「五役」の地位と跡式の特徴

五役とは、江戸城内外の雑務要員を担っていた目付支配諸役人のうち、最も人数が多い五つの役職（黒鋏之者・中間・小人・駕籠之者・掃除之者）をいい、その頭を五役の頭と称した。この五役を出発点として、その他の目付支配諸役へと転出・昇進していくのが、一般的であった。五役のうち、駕籠之者を除いた四つの役職を「四役」という。この差別が生じた理由は、駕籠之者は譜代ではあっても、駕籠を担うという職務上、相続する条件に身長規制があり、必ずしも親の跡を子が継げなかったからである。対して四役は、譜代の家格に相応しく、父から子へと家筋を引き継いでいくのが普通であった（表1「「五役」の職制と人員規模」参照）。

つぎの史料は、宝暦5年（1755）9月に発令された、五役をはじめ譜代と定められた御家人場所に関する申付である。⁶⁾

〔表1〕「五役」の職制と人員規模

職 名	禄 高	役 割	定 員
黒鋏之者	12俵1人扶持	江戸城内の土木工事や作事、堀割などの清掃、物品の運搬や御使に従事。また、将軍が遠出をする際には雑用のために随行。	470人前後。3人の黒鋏之者頭（100俵高）のもと3組に編成。
中 間	15俵1人扶持	江戸城内の御長屋門・大奥御長屋門・御台所前新土戸・大奥前仕切戸などの警備、御使などに従事。中間から中間目付が抜擢され目付部屋に勤務。	550人前後。3人の中間頭（80俵高）のもと3組に編成。
小 人	15俵1人扶持	御玄関や中之口などを警衛し、女中や奥役人の出入りに供奉。また、御使や用品の運搬などに従事。小人から小人目付が抜擢され目付部屋に勤務。	500人前後。3人の小人頭（80俵高）のもと3組に編成。
駕籠之者	20俵2人扶持	将軍やその家族が乗る駕籠の担ぎ手。	70人前後。3人の駕籠之者頭のもと3組に編成。
掃除之者	10俵1人扶持	江戸城内御殿をはじめ、紅葉山や吹上御庭など様々な場所の清掃に従事。また、御使や物品の運搬にも従事。	180人前後。3人の掃除之者頭のもと3組に編成。

本表は、田原昇「江戸城内の運営と「五役」―「新古改撰誌記」より―」所収表2より作成した。

〔史料1〕

御譜代并御抱場所申付

前々御譜代と相定取扱来候場所、左之通御座候

御留守居四組〔与力・同心〕 御留守居番五組〔与力・同心〕 百人組四組之内〔根来組・甲賀組〕 与力・同心 御本丸御裏門番六組同心 御天守下番 〔富士見御宝蔵〕

下番 進物取次下番同心 御女中様附伊賀者 明屋敷番伊賀者 御鷹匠同心

二丸留守居支配〔同心・小人〕 御臺所番人 御鉄炮玉葉奉行同心 御作事方定普請同心 御中間 御小人 御駕籠之者 黒鋏之者 御掃除之者

右場所江

権現様 台徳院様 大猷院様 厳有院様 御四代之内、右場所相勤候得者、御譜代之者と下ヶ札仕候、尤、右 御代より末 御代ニ而召抱、前書之場所相勤候共、其分者御抱入之者と下札仕候

但、前書場所之内ニも当時者御譜代之者と御抱入之者と入交御座候

（ 後 略 ）

4代将軍家綱までに御留守居組与力・同心以下21の御家人場所に召し抱えられた者は「前々御譜代と相定取扱来」といい、五役もこの中に入っている。ただし、4代以降にこれら御家人場所に召し抱えられたとしても「御抱入之者」として扱われ、結果、五役など右の御家人場所では「当時者御譜代之者と御抱入之者と入交」ることとなったという。

このように五役の者は、他の御家人の多くが抱席（一代抱）であったにもかかわらず、雑務要員ながら譜代の格式を与えられていた点が注目できる。五役の者は、江戸城内でさまざまな下働きをする都合上、大名や旗本はもちろん、將軍やその家族といった貴人の日常生活に接する機会が多く、江戸城内の様子を巨細に知り得る立場にあった。このため、城中保安のためにも一代にて召し放ちとはせずに、幕府は譜代として子々孫々まで身分を拘束し続けたのである。⁷⁾ よって彼らは、老衰や病気などにより退職した場合は、譜代の旗本・御家人が小普請組に編入されるのと同様、目付支配無役とされ、引き続き目付の支配を受けた。なお、五役のうち、江戸中期以降、新規に召し抱えられた家筋の者は抱席とされたが、跡式の相続が事実上許されており、いわば譜代同然に扱われていた。⁸⁾

かかる相続上の特権をもっている、五役の身分は御家人中最下級に位置していた。事実、五役の中には、職務中には苗字・帯刀が許されず通称・脇差にて勤務する者もいた。ただし、非番の際には苗字・帯刀となり、その姿は他の御家人と違いはなかった。また、禄高は下働き相応に低く、頭役の中には100俵を越える者もいるが、平役の多くは10～20俵前後であった。他の御家人、例えば諸組同心が15～30俵前後であることと比べても、禄高が一段低かった。

(2) 抱席御家人の跡式

史料1のような23の御家人場所に対して、他の多くの御家人は抱席とされてきた。その跡式における特徴は、あくまでその身一代限り抱入となり子孫が抱入となる保証が一切なかった点である。このためかえって抱入に制限がなくなり、必要な人数を随時・臨時に召し抱えることが可能となった。その様子を町奉行所組同心（町方同心）を事例に確認してみよう。⁹⁾

町方同心は、町奉行所の吏員として江戸市政に携わっていた、30俵2人扶持の抱席御家人である。彼らは抱席である以上、親の跡式に子を継がせる権利も義務もなく、町方同心の子息が他の町方同心の明跡を継ぐ場合もあれば、逆もあり得た。というのも、町奉行所にとって同心とは、その人物の血筋や家柄ではなく「身持ち」が重要であり、「早速御用＝相立」ことこそ肝要であったからである。直ちに御用に立つことを重視するからこそ、「組屋敷＝而育」「若年之節より見習」を勤めていた町方同心子弟の方が抱入の際に有利であったようだが、御用に立ちさえすれば、誰であっても同心に抱入となる可能性があった。事実、町方同心が何らかの理由で退任（「御暇」）した場合、その明跡（欠員）の補充は退役した同心が関知できることなく、町奉行所が決めるべき問題であった。そして町奉行所は、「早速御用＝相立」つ限り、大名家臣や浪人、百姓、町人出身者の抱入に躊躇はなく、結果、町方同心は、実に雑多な身分¹⁰⁾の出身者から構成されていたのである。

こうした抱入の特徴の結果、町方同心は、表2「町奉行所組同心の主な抱入形態」にあげた、さまざまな人数調達の方法をもつようになったのである。基本的には父跡式抱入・明跡抱入によって100人前後といわれている正規人員を確保する一方、入人・増人二十人抱入・仮抱入によ

〔表2〕町奉行所組同心の主な抱入形態

名 目	内 容
父（養父）跡式抱入	父親退任後の欠員への正規補充
明 跡 抱 入	他人退任後の欠員への正規補充
入 人	他の役職からの一時的出向者
増 人 二 十 人 抱 入	員数外の無期増員
仮 抱 入	臨時の短期増員
見 習	薄謝による訓練要員
無 足 見 習	無給による訓練要員

本表は、田原昇「江戸幕府御家人の抱入と暇―町奉行所組同心を事例に―」の記事より作成した。

て、員数外・臨時の増員を図り、見習・無足見習によって急場をしのぐといった方法である。このように町奉行所では、町方同心の抱席という格式を利用してできる限り所内で必要人数の調整を図ることが可能であり、同じく抱席からなる御家人の各役職でも同様の手段をとっていたと考えられるのである。

(3) 中間の跡式

多くの御家人が抱席であるが故に、町方同心のような柔軟な人数調整をおこない得たのに対して、五役の者は譜代として扱われ、その人数は代々の家筋数に拘束された結果、五つの役職の人数は各々硬直したものであった。とはいえ、五役すべてが譜代であったのではなく「御抱入之者」もいて、五役は「当世御譜代之者と御抱入之者と入交御座候」状況であったのも事実である。では、五役のうち御抱入之者が、その他多くの抱席御家人と同様に“一代抱”が原則であったかというそうではなかった。この点について、五役のうち中間を事例として確認しておく。

中間は、宝暦3年（1753）10月に倅の中から27人を新規抱入としたのを中心に、その前後で折にふれて新規抱入をおこなった¹¹⁾。文久3年（1863）ごろに作成された中間の勤方史料「新古改撰誌記」¹²⁾には、中間のうち御抱入之者の家筋55家分を「寛政以前御抱入之者代々記」（24家）、「新規御抱入之者代々記」（31家）に分けて収録した巻之33「新古抱代々記」という記録が含まれている。この55家という家筋数から、文久年間には中間550人前後のうちの約1割が御抱入之者であったことがわかる。また「寛政以前…」に24家しか記載がない以上、宝暦年間に抱入となった27人全員が幕末まで家筋を残せたわけではない有りがうかがえる。反面、この「寛政以前…」には寛文6年（1666）に新規抱入となった江本家の事例が記載していて、御抱入之者でも約200年にわたって長続きする家筋があった様子がうかがえる。¹³⁾

では、「新古抱代々記」において寛政以前とそれ以後に分けている理由はなぜかという、明和2年（1765）、御譜代之者の家筋以外でも、病気などを理由に退任した場合、または幼少で勤務に支障がある場合は、目付支配無役に編入するとの申付があったからである。¹⁴⁾その後、この明和2年の申付は寛政以前に御抱入の者にまで拡大されたようで、さまざまな手続きについて、寛政期以前とそれ以降とで差がつけられるようになった。つぎの史料は「寛政以前御抱入之家筋相続之節之文例」¹⁵⁾であり、上記の様子が如実に表れている事例となっている。

〔史料2〕

(前 略)

寛政以前御抱入之家筋実子相続之節之文例

御中間跡抱伺	御控	月番 鈴木四郎左衛門 野々山鉦蔵
--------	----	---------------------

覚	矢村斧右衛門組
御切米	御中間
一、拾五俵	御抱入之者 江本源助
壹人扶持	已五拾歳
	実子
	同 錦之丞
	已拾七歳

右源助儀病氣附、御奉公相勤不申候処、厄介も多難儀仕候ニ付、源助実子錦之丞儀、当已拾七歳罷在御奉公可相勤相応之者御座候間、右源助取来御切米御扶持方を以、錦之丞儀跡抱仕度奉存候、左候得者、厄介も養育為仕候ニ付、奉願候、以上

已十二月 御中間頭 矢村斧右衛門

右御控共三通

(後 略)

このように、中間・江本源助は「寛政以前御抱入之家筋」であるが、安政4年(1857)12月、病気を理由に退任を申し出ている。しかし「厄介も多難儀仕候」ため「右源助取来御切米御扶持方を以、錦之丞儀跡抱仕度奉存候」との願書を提出する。「新古抱代々記」で確認すると同年同月、無事に実子錦之丞が抱入となっている。確かに、表面上は「厄介も多難儀仕」との理由をもって実子の「跡抱」を願うといった体裁をとってはいる。が、明和2年の申付もあり、また、「寛政以前御抱入之家筋実子相続之節之文例」などと「相続」といった表現を用いている以上、この願書の受理は当然想定されていたのであろう。¹⁶⁾

では、寛政以後に御抱入となった家筋では、どうであったかという、やはり実子をはじめ「身寄之者」を優先的に抱入とする約束事があったようである。例えば「寛政以後御抱入相成候者之家筋実子并身寄之者御抱入相願候節之文例」に、嘉永3年(1850)11月、中間・朝倉金之助が、病気のため実子定次郎をその跡へ抱入としたい旨の願書が提示されている。¹⁷⁾その願書に「書面金之助儀、天保六末年七月新規御抱入拾九人之内之者ニ而、病氣附御奉公難相勤節者、御切米御扶持方差上候様被仰渡候者ニ御座候得共、厄介も有之、難渋之趣実ニ相違も無御座候

〔表3〕中間・三橋和吉の家筋

代目	抱入年月日	西暦	続柄	名前	備考
初	天明 4 年正月	1784	(初代)	三橋國五郎	家元・三橋啓五郎 三橋弥平次男にて抱入
2	文化11年12月	1814	國三郎実子	三橋國三郎	—
3	天保15年 8 月	1844	國三郎実子	三橋和吉	—
4	安政 5 年10月	1858	和吉弟	三橋銑平	—

この表は、江戸東京博物館所蔵「新古改撰誌記」巻之33「新古抱代々記」より作成した。

間、身寄之者新規御抱入被 仰付被下置候様仕度、奉願候」との付札が添付されている。この付札からもわかるように、天保6年に朝倉金之助など19人の者が新規抱入となったが、幕府は病氣退任した場合などに切米扶持方を取り上げると仰せ渡している。が、実際には「厄介も有之、難渋之趣実ニ相違も無御座候」との理由から「身寄之者」に自身の切米扶持方を下げ置くことを許容していたのである。ただし、名目は寛政以前の家筋とは異なり、あくまで「新規御抱入」ではある。

何れにしても中間は御抱入之者でも、名目はさまざまだが、寛政以前・寛政以後の御抱入に関わらず、幕府によって家筋の継続が許され、実質的には譜代の格として扱われたのである。その一例として、中間・三橋和吉の家筋を一覧としたのが表3「中間・三橋和吉の家筋」である。この表からわかるとおり、三橋家は、天明4年(1784)に中間・三橋銑平の次男國五郎が抱入となった家筋として「寛政以前御抱入之者代々記」に記載された24家の一つである。その後、三橋家は、実子國三郎・実子和吉・弟銑平により相続がなされ、まさに子弟をもって家筋が継承されていった様子がうかがえるのである。

ところが、こうした家筋の継承が実態であったかというとはなかった。つぎの史料は、三橋家のうち3代和吉と4代銑平の跡式に関する仰渡である。¹⁸⁾

〔史料3〕

(前 略)

(天保十五辰年)
弘化元辰年八月十四日御扣共三通、大内蔵殿江差出、翌十五日

萩原又作組

(御抱入之者)
同 断

御中間國三郎倅

橋本佐吉跡

三橋和吉

右伺之通、被仰渡相済

(中 略)

(安政五年午)
同年十月廿三日

(矢村斧右衛門組)
同 人 組

(從部屋住御抱入之者)
同 断

和吉弟

三橋和吉跡

三橋鉦平

右但馬守殿被仰渡候段、鉦藏殿立合、左京殿被申渡候

(後 略)

4代鉦平は、兄和吉の跡を安政5年(1858)に継いでいて「新古抱代々記」の記載と一致する。が、3代和吉は弘化元年(天保15年・1844)に中間・橋本佐吉の跡を継いでいることになっていて、父國三郎の跡を継いだとする「新古抱代々記」の記述とは食い違ってしまふ。

そこで、「新古改撰誌記」巻之34「部屋住代々記」から作成した表4「中間・三橋和吉の跡式」で、この点を確認したい。「部屋住代々記」によると、三橋家2代國三郎は、文化11年(1814)に遠山徳之進の跡を継ぎ、その後、天保9年(1838)橋本佐吉、天保15年(1844)三橋和吉、嘉永4年(1851)秋本鍋次郎がそれぞれ継いでいくといった様子となっている。このように「新古抱代々記」が家筋の継承順を記載しているのに対して、この「部屋住代々記」からは実務上における跡式(職責)の引継順が確認できるのである。すなわち三橋和吉は、父國三郎から「御切米御扶持方」を家筋として継承したのに対して、橋本和吉からは職務を引き継いだと考えられるのである。

以上、中間・三橋家の事例から、五役の跡式、とくに譜代としての家格の意味について明らかとなった点をまとめると、江戸城内の雑務要員の中核をなす五役の人数調達の特徴を語る場合、彼らの家格が譜代であり人数が比較的固定的であった点が重要な要因となってくる。すなわち、彼らは、江戸城内でさまざまな下働きをする都合上、江戸城内の様子を巨細に知り得る立場にあった。このため幕府は、城中保安のためにも一代にて召し放ちとはせずに、譜代とし

〔表4〕中間・三橋和吉の跡式

No.	抱入年月日	西暦	続柄	名前	その後
1	文化6年12月 部屋住より	1809	善六倅	木津平右衛門	文化7年4月 御抱替
2	文化7年4月 部屋住より	1810	無記載	遠山徳之進	文化11年3月 御抱替
3	文化11年3月 部屋住より	1814	國五郎倅	三橋國三郎	天保9年4月 御抱替
4	天保9年4月 部屋住より	1838	惣次郎倅	橋本佐吉	天保15年4月 御咎につき江戸払
5	天保15年8月 部屋住より	1844	國三郎倅	三橋和吉	安政5年10月 御抱替
6	嘉永4年11月 部屋住より	1851	次郎助倅	秋本鍋次郎	文久2年10月 御抱替
7	文久2年10月 部屋住より	1862	岩五郎倅	増田友八郎 戌38歳	—

この表は、江戸東京博物館所蔵「新古改撰誌記」巻之34「部屋住代々記」より作成した。

て子々孫々まで身分を拘束し続けたのである。なお、五役のうち、江戸中期以降、新規に召し抱えられた家筋の者は抱席とされたが、跡式の相続が事実上許されており、いわば譜代同然に扱われていた点は、中間・三橋家の事例で確認したとおりである。

一方、多くの御家人は抱席とされてきた。その跡式における特徴は、あくまでその身一代限り抱入となり、子孫が抱入となる保証が一切なかった点である。このためかえって、抱入に制限がなくなり必要な人数を随時・臨時に召し抱えることが可能となった。例えば町奉行所組同心は、基本的には父跡式抱入・明跡抱入によって100人前後といわれている正規人員を確保する一方、入人・増人二十人抱入・仮抱入によって、員数外・臨時の増員を図り、見習・無足見習によって急場をしのぐ方法をとっていた。すなわち町方同心はじめ抱席御家人は、一代抱という格式を利用して所内で必要な人数を調整することが可能であったのである。

このように、多くの御家人が抱席であるが故に、かえって柔軟な人数調整を各役職内でおこない得た。それに比べて五役の者は譜代として扱われた結果、その人数は代々の家筋数に拘束され硬直したものであった。とはいえ、雑務要員なればこそ、日々の庶務・雑用を処理する中、臨時的・突発的人数確保の必要が生じる場面が多かったこともまた事実である。

そこで第2章以降、かかる状況の中、五役の者が手不足人数を確保するための手段について、「御雇」を中心に見ていきたい。

2. 小人による「無足部屋住」の「御雇」

五役の者が、日々さまざまな雑務に合わせて人数の調達をおこなう手段に「御雇」があった。結論からいえば、これは金銭などで幕臣以外から人数を雇い入れるのではなく、同役同士、または他の役職から人数を借用することをいう。¹⁹⁾本章では、この「御雇」について小人の事例を中心に取りあげたい。

(1) 「御人少」と部屋住「御雇」

文政8年(1825)正月、西丸目付細田小兵衛から、西丸徒目付組頭・中間頭・小人頭・西丸駕籠者頭に対して、つぎのような申渡が廻達される。²¹⁾

〔史料4〕

(前 略)

御徒目付	式人
御小人目付	三人
御草履取	壱人
御持鍵役	式人
御手廻り	壱人

御傘持	式人
御挟箱持	四人
御雨覆持	式人
為御知御使之者	四人
御駕籠之者	拾人
御世話役	壹人

右者 政之助殿近々 御本丸江為 御逗留被為 入候節御供立、別紙折本之通、且、書面之人数御雇ニ而差出可申旨、壹岐守江伺相済候間、此段申渡候事

正月

細田小兵衛

(別紙折本略)

文政8年2月27日、12代將軍家慶の4男松平政之助は、御簾中様御養いとして御弘めがなされ、以後、若君様と称される。のちの13代將軍家定である。この御弘めにともない同年5月18日、初めて本丸での御逗留がおこなわれた。²²⁾史料4は、この本丸御逗留のため西丸から本丸への御供立に関する申渡である。西丸目付細田小兵衛は、西丸若年寄水野忠韶(「壹岐守」)に伺ううえ、徒目付2人・小人目付3人はじめ、中間・小人からは7掛16人、駕籠之者からは御世話役を含めて11人を動員する旨、申し渡したのである。ここで注目すべきは、この合計32人(「書面之人数」)を「御雇ニ而差出可申」としている点である。結局、この申渡に則り、右の人数が中間・小人・駕籠之者から御雇として動員されたのであるが、では、こここでいう御雇とはどのような人数調達の方法であるのか。

つぎの史料は、天保2年(1831)8月、御成などに動員された小人の中に「至而少キ御人も」²³⁾見うけられる件を、目付大久保忠実(「讃岐守」)が御尋した際の小人頭の回答である。

〔史料5〕

(朱字)
式百三 天保二卯年八月十五日讃岐守殿御尋ニ付、同十六日茂右衛門・弥一郎より差出ス
式百九番^(朱字)可見合事

御中間

御小人

黒鉄之者

御掃除之者

右四役之者倅共、先年者拾七歳以下ニ而も御抱入申上候義も御座候、然ル処、拾七歳以下倅共番入願書御請取被成間敷旨、寛延二巳年被仰合有之候処、其後、拾七歳以下倅御番入願差上候面々も有之、御請取被成候得共、以来、拾七歳以下ニ候ハ、御番入願書差上候而も、先達而被仰合候通、御請取被成間敷御沙汰之旨、天明八申年五月、被仰渡候後、拾七歳以下之者御抱入申上候儀無御座候、御尋ニ付此段申上候、以上

申八月

四役頭

右同断ニ付、弥一郎より讃岐守殿江差出ス

御小人方御人少ニ付、両山 御成・遠 御成之節者手足不申候ニ付、無足部屋住ニ而罷在候惣領共、拾三四歳ニ相成候得者、右 御成御供之方江、其日限り御雇申渡差出御間ニ合来ル、尤、御雇差出候者、別段御手当等者無御座候、御尋ニ付此段申上候、以上

卯八月

御小人頭

右者 御成其外罷出候御小人、年齢拾七以下ニ相見、至而少キ御人も有之、右ニ而も御宛行頂戴致居候もの哉、奥向より尋有之候趣を以、讃岐守殿御札有之候ニ付、前条四役倅共、拾七歳以下之者御抱入申上候義無之旨、御答書差出候処、又々至而幼少もの見へ候趣御尋ニ付、右之通御答書差出候事

当時、御成その他御用を勤める小人の中に年齢17歳以下に見える「至而少キ御人も有之」様子に疑問をもった奥向から目付衆に御尋があった。というのも、「四役之者倅共」について、かつては17歳以下でも御抱入していたところ、寛延2年（1749）には「拾七歳以下倅共番入願書」を受理しないようにとの仰含があった。しかし、その後も17歳以下倅共の御番入願書が後を絶たなかったため、天明8年（1788）5月、17歳以下倅共の御番入願書を受理しない旨が仰せ渡されていたからである。ところが、御成その他御用の様子を見る限り、「至而幼少もの」がいる。そこで、奥向きから目付衆への御尋となったのである。

この御尋に対して目付大久保忠実、四役頭に糺したところ、小人頭からの回答に「御小人方御人少ニ付、両山 御成・遠 御成之節者手足不申候」という。そこで「無足部屋住ニ而罷在候惣領共、拾三四歳ニ相成候」者を御成御供として「其日限り御雇」して「間ニ合来」た。しかも彼ら「無足部屋住ニ而罷在候惣領共」へは、「別段御手当等者無御座候」という。

このように、小人は「御人少」を理由に無足部屋住の惣領どもをその日を限り、しかも、とくに御手当などは支給しないで御雇としてきたのである。ここから御雇とは、無給の手助けを在職者の子弟に要請することを意味することがうかがえよう。

ではなぜ、四役の者については、17歳以下の御抱入が不可とされていたのか。つぎの史料は史料5とともに、小人頭から目付大久保忠実に提出された回答である。²⁴⁾

〔史料6〕

^(朱字)
式百九 卯十一月九日、讃岐守殿御尋ニ付差出ス

^(朱字)
式百三番可^(朱字)見合事 御小人手足り不申節者無足倅共御雇仕差出候、兼々御尋ニ付申上候

一、両山・紅葉山 御成之節、御先傘・奥御道具等持人江相加差出申候

一、遠 御成之節者、御烏持・奥御道具等持人江相加差出申候

一、御城内 御成之節も、格別御用多ニ而御人手足り不申候節者、相加差出申候

右之外、軽キ御用柄江者差出、廉立候義ニ者為相勤不申候、以上

卯十一月

御小人頭

このように史料6は、「御小人手足り不申節者、無足倅共御雇仕差出候」際の具体的な御用柄を書上としたものである。その末尾に御用柄をまとめて「軽キ御用柄江者差出、廉立候義ニ

者為相勤不申候」とある点が注目できる。すなわち「無足倅共御雇」では、あくまで「輕キ御用」の人数に使い、「廉立候義」には派遣しないとしているのである。恐らく將軍やその世嗣を相手とする御成である以上、例え雑務とはいえ「廉立候義」に17歳以下の者を派遣できないといった事情があったのであろう。また、五役の雑務は基本的に物持ちなど力仕事が多く、非力な「至而幼少もの」は「輕キ御用柄」以外では役立たないとの理由も、史料6からはうかがえる。だからこそ「御人少」「手足り不申」という状況でも、幕府では17歳以下の四役の倅共を御抱入とすることを不可とし、四役頭も、17歳以下の倅共（「至而少キ御人」「至而幼少もの」）については御雇しても「其日限り」「別段御手当等者無御座」「輕キ御用」を条件としたのであろう。

では、小人が「御人少」の際に御雇とする人数は、「無足倅共」に限られていたのかというと、そうではなかった。例えば中間頭の勤方を書上げた「年番ニ而取扱品」には、「駒場 御成并乗馬有之節御人不足之節、黒鯨之者御雇、且、黒鯨之者も不足ニ候得者、御掃除之者も御断申上候事」とある。²⁵⁾すなわち駒場御成や乗馬の節に「人不足」ならば黒鯨之者を「御雇」（人数借用）して、さらに黒鯨之者だけでは不足ならば御掃除之者からも「御断」²⁶⁾（人数要請）していたのである。

このように五役の者は、譜代という家格に拘束されて柔軟な人数調達が困難となっていたが、そうした状況の対処として、相互に不足した人数を御雇し合うといった手段をとっていたのである。では、御雇という手段は、五役のみの事例かということそうではなかった。そこで次節では、幕府諸役職に散見する御雇を検討し、幕府職制における御雇の意味を考えてみたい。

(2) 幕府によるその他の「御雇」

表5は、幕府奥右筆・向山誠斎が弘化2年（1845）に著した、大老以下各役職の概略書「吏徴」「吏徴別録」「吏徴附録」から、幕府の役職における御雇の事例を一覧としたものである。²⁷⁾ No.1 小普請方手代・No.2 御材木石奉行手代・No.3 小普請方改役下役・No.4 御賄六尺・No.5 西丸御賄六尺・No.6 御材木石奉行同心といった六つの役職に「御雇」を名目とした人数が見うけられる。No.4 御賄六尺とNo.5 西丸御賄六尺はともに「二半場」²⁸⁾（譜代准席）で、五役の者と同じ様な家格であるが、それ以外の四つの役職は「御抱場」（抱席）である。

どうやら「御雇」（人数借用）は、譜代、二半場、抱席を問わず採用されていた手段で、当初は、五役の者における御雇のように、臨時に人手が必要な際に便宜上役職内の子弟などから人数を借用していたものであった。臨時、便宜上だからこそ「吏徴」の五役の項目には御雇に関する記述が見あたらないのであろう。しかし役職によっては御雇が次第に常置化され、ついには「吏徴」のような役職勤方概略書に員数内訳として記載されるまでになったと思われるのである。

さて、五役における御雇と同様に、臨時、便宜上おこなわれ、「吏徴」には見あたらない御雇の事例が、火付盗賊改方に見うけられるので紹介したい。つぎの史料は、火付盗賊改役・長

〔表5〕幕府役職におけるその他の「御雇」事例

No.	役職名	定員	役高	内訳	格式
1	小普請方手代	45人	30俵3人扶持高	御雇 3人 2人扶持 出役 13人 3人扶持	御抱場
2	御材木石奉行手代	8人	30俵2人扶持高	元ノ 2人 35俵3人扶持 同助 1人 勤金2両 御雇手代 5人 5人扶持	御抱場
3	小普請方改役下役	15人	持高役扶持2人扶持	御雇 6人 2人扶持 出役 5人 2人扶持	御抱場
4	御 賄 六 尺	388人	持高	下役 役切米5俵役金4両 書役 役金4両 御酒部屋書役 役切米5俵 勘定部屋書役 役切米5俵 御豆腐役 役切米5俵 肴役所出役 3人 役金5両 青物役所出役 3人 役金5両 御薪方下役 8人 役切米5俵 寸打役 金3両 見習 20人 1人扶持 両丸御雇 30人 [六尺新組打込]	二半場
5	西丸御賄六尺	113人	持高	同上	二半場
6	御材木石奉行同心	33人	15俵1人扶持高	組頭 3人 20俵1人扶持 御雇同心 6人 1人扶持	御抱場

この表は、「史徴下巻」(『続々群書類従』第7巻、国書刊行会、1907年)より作成した。

谷川平蔵組与力・中山為之丞に関する寛政2年(1790)3月11日ごろの「よしの冊子」の記事である。²⁹⁾

〔史料7〕

(中 略)

一、石川島無宿養育地の事、長谷川骨を折候由大ニ難有事、自然と倒れもの抔もなく、武家町ニても悦可申由。右ニ付平蔵与力同心不足ニ御ざ候間、与力一人、同心十一人、増人出来候由。与力ハ中山下野守組中山為之丞と申もの、よし。下野組ハ五騎ニ付甚迷惑致候間、平蔵へ相断候へ共、為之丞功者ニ付、達て平蔵より相望候間無扨遣候由。尤為之丞ハ加役方功者成もの、よし。

一、長谷川平蔵組へ御雇ニ出候中山下野組与力中山為之丞ハ、大島流鏑上手のよし。大島流でハ為之丞位の者有まじきとのさた御ざ候よし。先達而加役相勤候節、中間を捕へ手を切られ候男の由。為之丞ハ至て人のかわゆがり候男の由。中山下野守組与力五人ニ付平蔵へ中山より断申候へ共、御さし人同然ニ御雇ニ致候由。

(後 略)

火付盗賊改役長谷川平蔵は、天明の打ちこわし後、江戸市中における無宿対策として無宿の

収容・授産施設の設立を献策し、その設立責任者（「長谷川骨を折候由」）となった。寛政2年には、隅田川河口の石川島に人足寄場（「石川島無宿養育地」）として完成し、平蔵はそのまま運営責任者となる³⁰⁾。この人足寄場設立事業に際して、長谷川平蔵は「与力同心不足に御ざ候」ため、配下として与力1人、同心11人の増人を願う。この時、増人与力として先手弓頭中山下野組与力から長谷川平蔵組に配置替えとなったのが、中山為之丞である。

中山は、かつて火付盗賊改役（「加役」）の部下を勤めた際、「巧者成もの」との評判が高く、しかも「大島流鏑上手」「至て人のかわゆがり候男」といった人物でもあった。そこで、同じく手不足である中山下総組からは「甚迷惑」とされながらも、「達て平蔵より相望」んで今回の配置替えとなったという。注目すべきはその配置替えの名目で「長谷川平蔵組へ御雇ニ出候」、あるいは「御さし人同然ニ御雇ニ致候」といったものであった。まさに五役の者の事例と同様、与力・同心不足を補うため、他組与力を御雇に差し出させたというのである。

このように御雇制は、幕府職制の随所で確認することができる。が、その有り様は、五役の者や長谷川平蔵組与力・中山為之丞の事例など、より臨時、便宜上の意味合いが強い御雇もあれば、表5 No.1～6のように常置化したものもあった。何れにしても御雇による人数は、身内あるいは他部署からの借用人数といった意味合いが強かった点に違いはなかったようではある。そして、この御雇を利用して幕府諸役人は臨時業務のための人数を調達し、可能な限り家格の構造や人員規模に変更を加えることなく、勤務を遂行していったのである³²⁾。

3. 「五役」による公儀人足の「御断」

前章で述べた御雇という制度は、確かに臨時に人数を調達するのに都合がよい制度であり、相手方に御雇を差し出す人数的余裕があればとても有効な手段であった。この点は、第2章第2節で取りあげた「年番ニ而取扱品」に「黒鋏之者も不足ニ候得者、御掃除之者も御断」とあるとおりである。では、なおも人数が不足し、すでに身内や五役の中から御雇人数を調達する余裕がなくなっている場合にはどのような方法が用いられたのであろうか。

そこで本章では、下三奉行（勘定奉行配下の普請奉行・作事奉行・小普請奉行）が町人請合で調達した日雇人足を、黒鋏之者が「黒鋏代人足」として「御断」（人数要請）する事例を取りあげ、五役の者の業務を町人請合人足が補完していた様子について検討したい。

(1) 黒鋏之者による「御作事人足」の「御断」

つぎの史料は「御書物蔵長持人」として、黒鋏之者が御作事方から人足を御断した際の書付である³³⁾。

〔史料8〕

人足仮断

御作事奉行衆

御当番目付

覚

御作事人足 四人

但、朝四時揃

右者、明廿五日御書物蔵御長持持人之方江黒鯨之者手足不申候ニ付、請取申度奉存候、書面刻限之通、西丸二重橋外黒鯨之者詰所江相揃候様、御作事方江御断被下候様仕度奉存候、以上

(慶應元年カ)

九月幾日 黒鯨之者頭

柳田勝太郎

慶應元年（1865）9月24日、黒鯨之者頭・柳田勝太郎は、御書物蔵から御長持を運び出すための持人が「手足不申」といった状況になり、当番目付から作事奉行衆へ「御作事人足」4人を「請取申度奉存候」との御断を入れた。この「御断」（人数要請）を受けて作事方から派遣された御作事人足4人は、朝四ツ時に西丸二重橋外の黒鯨之者詰所に揃い、黒鯨之者先導のもと御書物蔵で長持の運送作業にあたることとなった。

このように黒鯨之者は「手足不申」場合に、作事方から人足を「御断」（要請）し、随時、人数不足を解消していたようである。事実、作事奉行は、かかる人数不足が生じた幕府諸役へ人足を派遣する役割を担っていたようである。つぎの史料は、作事奉行の勤方をまとめたものであるが、その中に、黒鯨之者をはじめ幕府諸役到人足を派遣していた様子がうかがえる。³⁴⁾

〔史料9〕

御作事奉行〔二千石高 美 老支〕

専木工之事を司り、御大工頭吟味役下奉行の属役を率ひて其場を修理す、御本丸西丸共表向御座敷御城内とも繕ひ御修復、増上寺一山御霊屋御供所立定式棟梁大工木挽諸色并人足、其外筆墨紙薪炭小買物并御材木取木水揚筏組、御屋根方并高石垣草取、外曲輪御門の渡御櫓番所御橋詰地槽繕、溜池山王并火消屋敷五ヶ所山屋敷猿江御材木蔵駒場の御成先御薬園御茶屋聖堂积燐御用、御作事定小屋御新初山王神田祭礼幕張人足、御普請の外御向人足、御鉄炮方渡人足、同旅人足、御城内鶏威、雪除、西丸御台所定掃除、黒鯨代人足、御飭御用、上野御宮等也、其外御規式御成先鶴鶉御地遠国の御用、三州矢矧橋等表向に掛る所ハ皆関る、御場所見廻り野服也、兼帯ハ宗門方也

このように、作事奉行は、「専木工之事を司り、御大工頭吟味役下奉行の属役を率ひて其場を修理す」という役目を持ち、下三奉行のうち普請奉行が地取・石垣などを担当、小普請奉行が繁雑な工事を担当する中、作事奉行は殿屋建築を担当していた。³⁵⁾ によって作事奉行は、建築工

事のための「御作事人足」を多く抱えていた。そこで、「黒鋏代人足」はじめ「御作事定小屋御新初山王神田祭礼幕張人足、御普請の外御向人足、御鉄炮方渡人足、同旅人足」など、黒鋏之者や御鉄炮方、御普請方外向御用に人足を派遣する役目を担っていたのである。

それでは、この「御作事人足」とは何者かということが問題となってくる。

(2) 下三奉行と公儀人足請負町人

先述のとおり、下三奉行は、土木建築を相互に補完しつつ担当していた関係から、業務上、多くの人足を抱えていた。一例をあげると「小普請の面々御破損の人足」「御普請人足³⁶⁾」「御普請方の日雇之者³⁷⁾」「公儀御普請方并諸人足³⁸⁾」といった者どもである。

これら公儀人足は、当初、無役旗本の間などを軍役として人足に提供させていたものである。が、旗本たちは人足の管理・派遣を煩瑣なこととして、次第に町人たちが請け負って人足を調達・派遣するようになる。寛文年間、幕府はこの旗本個々人による町請人足を禁止し、代わって、幕府勘定所が無役旗本から金銭を徴収し（「小普請金³⁹⁾」、一括して町人に請け負わせて人足を調達するようになる。これら人足の請負人などを「公儀御普請方并諸人足請負之者」という。彼ら公儀人足請負人は、当初、日雇座の管轄下にあったが、寛政9年（1797）8月、日雇座が廃止されると、勘定所が直接管轄するようになる。⁴⁰⁾ こうして幕府勘定所は「公儀御普請方并諸人足請負之者」を介して「御普請方の日雇之者」といった町方人足を調達し、下三奉行など土木建築を専管する諸役へ配置するようになったのである。

すなわち江戸幕府においては、二つの意味で人数調達のための“雇”がおこなわれていたといえる。これを五役の者を事例に改めてまとめてみると、例えば小人は、人数不足の時には、まず無足部屋住を「御雇」（借用）し、なおも不足の場合には、漸次、黒鋏之者、掃除之者を御雇して、雑務を処理していたのである。また黒鋏之者は、人数不足の際には勘定所が公儀人足請負人を介して「日雇」（日払い労働契約）とした「御作事人足」を、目付を通じて「御断」（人数要請）し、日々の用務に充てていた。いわば五役の者による雑務の現場では、小人に御雇された無足部屋住・黒鋏之者・掃除之者が立ち働き、その近辺では、勘定所に町方から“雇”入れられた「御作事人足」が黒鋏之者と立ち働くといった、役職や身分が異なるさまざまな労働力が入り交じった様子が日常的であったのである。

では、こうした御家人・百姓町人入り交じりの現場を取りまとめていたのは何者かというと、最終的には五役の者を支配する目付であった。つぎの史料は、目付に対して「城中への人夫」などの監視を強化する旨を令した通達である。⁴¹⁾

〔史料10〕

（元禄16年12月5日）この日目付の輩へ令せらるゝは、営築により城中へ人夫等多入れば、暮に及び退くとき、のこるものあらんもはかりがたければ、平川口、塩見坂、切手庵所前、其他人夫等まかる所は、宿直の目付兩人、徒目付つれて、夜中しばゝまはり、翌朝其旨

聞えあぐべしとなり。

元来、目付は、戦場で諸士の進退を監督する“軍目付”が本務で、同時に目付は、諸士の従者（中間など）や雑役夫（黒鍬之者など）の行動も差配していた。結果、平時には、諸士の行動を監査する監察官としての役目を担う一方、五役をはじめ幕府の下働きを支配する役目を担うこととなった。同時に、目付支配ではなくとも、例えば「御作事人足」「営築により城中へ人夫等」といった、その他役職が支配する雑役人足も監視・監督するようになった。⁴²⁾結局、同じく目付に監督、監視され、なおかつ同様の雑務を担っている五役の者（御家人）や公儀人足（百姓町人）は、相互に人数を遣り繰りしやすい間柄であり、これこそ、江戸城内における庶務・雑用を円滑に処理できた秘訣であるとも考えられる。さらに、その人数調達のための用語として“雇”という言葉がさまざまな意味で使用されている点が興味深いのである。

4. 旗本の「御雇」

最後に、御雇という制度が五役を支配する目付でもまた利用されていた様子を紹介したい。⁴³⁾

(1) 木村芥舟の懐旧談

目付は幕府政務一切の監察をおこなう以上、その業務は煩雑を極めていた。例えば、木村芥舟は、万延元年（1860）に咸臨丸の司令官として日本人初の太平洋横断を成功させた人物として著名だが、その前歴として、安政2年（1855）から西丸目付となり、翌年から本丸目付に転任し、1年ほど在任している（元治元年（1864）再任）。

彼は、維新後に目付時代を懐旧して「幕府目附の職務は極て繁碎にして、中には抱腹絶倒すべき杓子定規も多きこと」と断じている。⁴⁴⁾さらに、その「繁碎」を処理する手段として、つぎのような談話を寄せている。⁴⁵⁾

〔史料11〕

（ 前 略 ） 供番は紅葉山、両山（芝上野）の定式廟参をはじめ、其他鷹野等目付二人扈従し同勢を監督し、一切の事を指揮し不都合の事なからしむ、近来目付人少繁劇なれば二人の内一人は当日限り使番を雇ふ（ 後 略 ）

供番とは将軍が他出する際の行列の監察を勤める目付中の掛で、通常は2人勤務があるが、「近来目付人少繁劇なれば二人の内一人は当日限り使番を雇ふ」という有り様であったという。使番は、定員110名、役高1000石の役職で、将軍や幕府の上使を勤める歴とした旗本役である。また、使番をへて目付となる者が多く、いわば目付採用に向けての試用期間でもある役職であった。その使番から、繁劇の際には供番の1人として「当日限り…雇ふ」というのである。

(2) 「御供御雇」と使番

この目付による使番の「当日限り…雇ふ」といった姿は、つぎの史料からも明らかである。⁴⁶⁾

〔史料12〕

安永六酉年正月廿四日増上寺惣御霊屋江御先行列ニ被為成候御供御目付御雇勤方衣服熨斗目半袴

御目付 山川下総守

御雇 朽木鞠負

御門明登 城御目付御雇罷出候段、御目付衆江相届、山川総州被出候ニ付、御供勤方之儀承合、委細申談候而、部屋江罷越候、御徒目付尾本藤右衛門参逢申度旨、申聞候間、致面談候処、今日御供之節自分江御附添候由申聞候間、諸事申談置候事

(後 略)

このように、「御目付 山川下総守」と並んで「御雇 朽木鞠負」が記されている。この朽木鞠負（真綱）こそ、安永6年（1859）正月、増上寺惣御霊屋御参詣の先発行列に目付・山岡下総守とともに随行するため「当日限り…雇」われた使番であった。

では、かかる「御供御雇」の事例は、使番にとって何を意味するのか。もちろん、目付衆から御雇の使番へ何らかの賃金が支払われたわけではなくしかも無手当であった。しかし、前述のとおり、使番はいわば目付への試用期間であり「有望の者を擢て目附に挙」⁴⁷⁾げることを想定して、目付は使番に接していた。よって「御供御雇」は使番にとって目付業務を体験し目付に自身の力を見せつける好機であったのである。この点は、恐らく同様のことが小人に御雇となった「無足部屋住」などにもいえるかと考えられ、いわば御雇は「無足部屋住」にとって五役勤務の演習ともなっていたかと思われる。

おわりに

以上、本報告を通じて、五役による「御雇」制を中心に、江戸城内の下働きであった五役の者たちによる手不足人数の調達方法について検討してきた。合わせて、五役だけではなく旗本や他の御家人の役職においても時に応じて手不足となり、やはり御雇制を利用していた実態についても明らかにした。この御雇の様子についてまとめると、つぎのとおりである。

五役の人数調達の特徴を語る場合、彼らの家格が譜代であり、人数が比較的固定的であった点が重要な要因となってくる。多くの御家人が抱席であるが故に、かえって柔軟な人数調整を各役職内でおこない得たのに対して、五役の者は譜代として扱われた結果、その人数は代々の家筋数に拘束され、五役全体で硬直したものとなった。とはいえ五役の者は、雑務要員なればこそ、日々の庶務・雑用を処理する中、臨時的・突発的人数確保の必要が生じる場面が多かったこともまた事実である。そこで五役の者が手不足人数を調達する手段として採用していたの

が御雇である。

御雇とは、小人など五役の者が、「御人少」を理由に無足部屋住の惣領どもをその日を限り、しかも、とくに御手当などは支給しないで「御雇」（人数借用）することである。この御雇ならば、あくまで一時的な労力の借用・調達にすぎず、譜代という家筋に拘束された五役でも、当座の人数を調達できる長所があった。ただし、江戸城内の雑務は力仕事が中心で、非力な「至而幼少もの」では対処しきれない作業が多かったのも事実であり、「御人少」「手足り不申」という状況の中で倅共を御雇しても、あくまで「其日限り」「別段御手当等者無御座」といった条件で「軽キ御用」に宛っていたのである。

また、小人など五役の者が御雇とする人数は、何も「無足倅共」に限られていたわけではなかった。御成御用など、特別に人数を必要とする業務ならば、例えば中間は、まず倅共を御雇し、さらに同じく五役の中から黒鋏之者を御雇し、なお人数不足ならば掃除之者を御雇するといった規定があったのである。

そして、御雇といった手段は五役のみの事例ではなく、その他の幕府諸役にも散見するのである。その役職とは小普請方手代や御賄六尺などで、経理を扱う役職が多く、「吏徴」を見る限り御雇が常置化されていた様子も見てとれた。一方、中山為之丞の事例など、五役と同じく臨時、便宜上の意味合いが強い御雇もまた諸史料の中には見出せる。

さて、それでも人手不足の場合にはどうしていたのかというと、例えば黒鋏之者は、作事奉行に「御断」（人数要請）し、随時、公儀人足を派遣してもらっていたのである。この公儀人足とは、幕府勘定所が「公儀御普請方并諸人足請負之者」を介して「御普請方の日雇之者」といった町方人足を調達し、下三奉行など土木建築を専管する諸役へ配置していた人足である。ここに「日雇」とあるが、もちろん五役に見られる身内やその他役職からの借用人数（「御雇」）を意味するのではない。金銭によって町方から調達されたいわゆる日雇い労働者である。

すなわち江戸幕府においては、二つの意味で人数調達のための“雇”がおこなわれていたのである。例えば小人は、人数不足の時にはまず無足部屋住を「御雇」（借用）し、なおも不足の場合には、漸次、黒鋏之者、掃除之者を御雇して雑務を処理する。また黒鋏之者が人数不足の際には、勘定所が公儀人足請負人を介して「日雇」（日払い労働契約）した「御作事人足」を、目付を通じて「御断」（人数要請）し、日々の用務に充てていた。いわば五役の者が立ち働く現場では、御雇された無足部屋住やその他の五役がいて、その近辺では勘定所が町方から「雇」入れた人足と一緒に立ち働くといった、役職や身分が入り交じった様子が日常的であったのである。

かかる入り交じり状況が可能であった背景には、五役の者も「御作事人足」なども、同じく目付に監督、監視を受ける者たちであったからである。だからこそ、五役の者や公儀人足は、相互に人数を遣り繰りしやすい間柄であり、これこそ、江戸城内で庶務・雑用が円滑に処理できた秘訣であると考えられる。さらに、その人数調達のための用語として“雇”という言葉が

さまざまな意味で使用されている点が興味深い。

加えて、御雇という制度が、目付においてもまた利用されていた様子が見うけられた。目付は使番を「当日限り…雇」とし「繁劇」な目付業務の手助けとする一方、使番では、目付抜擢の好機として「有望の者を擢て目附に挙」げられることを想定しつつ、「御供御雇」といった職務に励んでいたのである。この点は、恐らく同様のことが小人に御雇となった「無足部屋住」などにもいえるかと考えられ、いわば御雇は「無足部屋住」にとって五役勤務の演習ともなっていたかと思われる。

こうした御雇制度は、幕府が保有している人員規模をできるだけ変更することなく、平時・臨時を問わず、さまざまな役職・業務において人数調達・調整の手段として活用できるものであった。従来、幕府職制を語る際には、旗本・御家人の総数や身分・家格にもとづく職務遂行の様子が中心となっていたが、それとは異なった人員補充の実務的な処理の様子が明らかにできたかと考えている。かかる御雇の幕制全体における位置づけや、幕末の“御雇外国人”などとの関連を今後の課題として、本稿を終えたい。

【註】

- 1) 「五役」の概要については、『古事類苑』官位部3（吉川弘文館、1905年発行、1978年縮刷普及版）、松平太郎『校訂 江戸時代制度の研究』（柏書房、1919年発行、1971年復刻版）、田原昇「江戸城内の運営と「五役」―「新古改撰誌記」より―」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第12号、2006年）を主に参照した。
- 2) 譜代（譜代席）とは、家禄を代々相違なく相続できる家柄をいい、御家人の場合、家康から四代將軍家綱までにある特定の役職に抱入となった家筋などが譜代となっていた。なお、旗本はすべて譜代である。一代抱（抱席）とは、あくまでその身一代のみ抱入となり、子々孫々が抱入となる保証がなかった者をいう。御家人のほとんどがこの一代抱えであった。二半場（譜代准席）とは、譜代と一代抱の中間的な地位で、本来は抱席として扱われる御家人のうち四代將軍家綱までに特定の役職を勤めた家筋をいう。譜代に准じた相続が許されていた。詳しくは、田原昇「江戸幕府御家人の抱入と暇一町奉行所組同心を事例に一」（『日本歴史』第677号、2004年）を参照。
- 3) この点については、第1章第2・3節を参照。
- 4) この点については、第2章で詳述する。
- 5) この点については、第3章で詳述する。
- 6) 「憲教類典」二之十四御抱席（内閣文庫所蔵史籍叢刊第38巻『憲教類典』（2）、汲古書院、1984年）所収。
- 7) 恐らく、五役以外の18の御家人場所も同様の理由で「御譜代と相定取扱」われてきたと考えられるが、未詳である。
- 8) この点については、第3節で詳述する。
- 9) 本節は、前掲註（2）田原論文を主に参照した。
- 10) 前掲註（2）田原論文19～22頁。
- 11) 前掲註（1）松平同書803・804頁。なお、同書によると、黒鯨之者は宝暦10年（1760）に子弟15人を新規抱入、掃除之者は宝暦10年に部屋住8人を新規抱入するなど、宝暦期が五役の者新規抱入の一つの山であったようである。
- 12) 江戸東京博物館所蔵「新古改撰誌記」（資料番号95201731～95201761）は中間頭の勤方に関する

- 控書で、全31冊（1～34巻、うち12・23・26巻欠本）の竖帳からなる。本報告では、とくに五役の者の具体例などは本史料によった。さらに、「新古改撰誌記」には、全34巻を通じて件名ごとに一から七百十まで朱字で通し番号が添えられている。同史料中における引用箇所指示は、適宜、この朱字番号を利用したい。なお、「新古改撰誌記」については、前掲註（1）田原論文を参照。
- 13) 江本家が、4代將軍以前に抱入となった家筋であるにもかかわらず、御譜代之者ではなく御抱入之者とされている点は不明である。あるいは「清揚院様（甲府綱重）御時年号月不知被召抱」とある村川家と同じく当初は徳川家の御家門大名に抱入となり、4代將軍以降に將軍家に転入してきたものであろうか。なお、江本家以外の23家はすべて4代將軍以降の抱入である。
- 14) 前掲註（1）松平同書809・810頁。なお、目付支配無役については、第1節を参照。
- 15) 前掲註（12）「新古改撰誌記」巻之32「（家督・跡式・跡抱等之儀に付諸願・届・伺書方帳）」。
- 16) 元来、「相続」という用語は、譜代の家格をもつ旗本・御家人の世代交代でのみ使用される言葉であり、抱席の世代交代には「抱入」あるいは「番代」といった言葉が用いられていた。詳しくは、竹内誠編『徳川幕府事典』（東京堂出版、2003年）62・63頁「家督・縁組・養子」の項（田原昇）を参照。
- 17) 前掲註（15）同史料。
- 18) 前掲註（12）「新古改撰誌記」巻之9「御役出・目付無役・跡抱」五百五。
- 19) 『日本国語大辞典』第19巻（小学館、1976年）「やとい【雇・傭】」の項に「①給金を払って人をやとうこと。またそのやとわれた人。恒常的、本来的なものではなく、一時的、また、ある年限をきってやとう場合をいう。（出典略）②借用すること。かりること。（出典略）」とある。本報告で、このうち②の意味をもつ「御雇」について取りあげる。
- 20) 『大日本近世史料 柳営補任』1～6・索引上下（東京大学出版会、1963～1970年）西丸目付・細井小兵衛の項。
- 21) 前掲註（12）「新古改撰誌記」巻之2「（諸達書・願書・伺書留帳）」百三十の上。
- 22) 『徳川諸家系譜』第1（続群書類従完成会、1970年）109頁「家慶公第七之御子 家祥公 政之助君」の項、および『続徳川実紀』第2編（吉川弘文館、1966年）121頁参照。
- 23) 前掲註（12）「新古改撰誌記」巻之3「（諸達書・願書・伺書留帳）」二百三（二百九番可見合事）。
- 24) 前掲註（23）同史料二百九（二百三番可見合事）。
- 25) 前掲註（15）同史料七百五。
- 26) その他役職などから人数を「御断」する件については、第3章で詳しく取りあげる。
- 27) 「吏徴」「吏徴別録」「吏徴附録」（『続々群書類従』第7巻、国書刊行会、1907年所収）。また、本史料の書誌情報については『日本史文献解題辞典』（吉川弘文館、2000年）1096頁「吏徴」の項を参照した。なお、表5で取りあげた以外にも、「吏徴」には、遠国奉行や代官の配下に「御雇」の事例が多数見うけられる。しかし、これら御雇人数は「手限り」（遠国奉行や代官の権限にもとづく現地採用）による人事であり、幕府直轄の人員に関わる表5の事例とは意味合いが異なるため省略した。
- 28) 二半場については、前掲註（2）を参照。
- 29) 「よしの冊子」（『随筆百花苑』第9巻、中央公論社、1981年）「九十九 自戊三月十一日」条。
- 30) 前掲註（16）『徳川幕府事典』381・382頁「人足寄場」の項参照。
- 31) 中山下野守直彰は、安永5年（1776）6月から寛政9年（1797）8月まで先手弓頭を勤めていた。『大日本近世史料 柳営補任』3（東京大学出版会、1964年）20頁、先手弓頭・中山伊勢守〔下野守・周防守〕直彰の項を参照。
- 32) 「御雇」と同じく、可能な限り家格の構造や人員規模に変更を加えずに職務を運営する方法として足高の制がよく知られているが、両者の比較や役割の違いなどについては今後の課題としたい。なお足高の制については、泉井朝子「足高の制に関する一考察」（『学習院史学』2、1965年）を参照。
- 33) 「（慶應二年・黒鉄之者）勤方諸心得控」（江戸東京博物館蔵・資料番号89205146）。

- 34) 「明良帶録」(『改定史籍集覧』第11冊、臨川書店、1984年復刻版) 作事奉行の項をもとに、前掲註(1)『古事類苑』官位部3 作事奉行の項で適宜補った。
- 35) 前掲註(1)『古事類苑』官位部3・631頁。
- 36) 「小普請人足」(『東京市史稿』産業編5、1956年、455・456頁)。
- 37) 「鳩巢手翰 知」(『古事類苑』政治部3、吉川弘文館、1978年、631・632頁)。
- 38) 「御触書寛保集成 四十一」(高柳真三・石井良助編『御触書寛保集成』(岩波書店、1937年復刊) 日雇稼者之部・2376。
- 39) 前掲註(16)『徳川幕府事典』小普請組の項参照。
- 40) 西山松之助・他編『江戸学事典』(弘文堂、1984年) 日雇座の項参照。
- 41) 「常憲院殿御実紀 卷四十八」元禄16年12月5日条(『徳川実紀』第6編、吉川弘文館、1965年)。
- 42) 前掲註(1) 田原論文180頁。
- 43) 目付による「御雇」の様子については、すでに、田原昇「目付が助っ人を雇う話～「御目付御雇」のこと～」(『古文書通信』72、NHK学園、2007年)で詳しく取りあげている。ので、本報告では、その概略のみ述べた。
- 44) 木村芥舟「旧幕府監察の勤向」(『旧幕府』第1号、富山房、1898年)。
- 45) 前掲註(44) 同史料。
- 46) 「御供御雇勤方」(江戸東京博物館蔵・資料番号90370269)。
- 47) 前掲註(44) 同史料。

【付記】

平成20年(2008)3月23日(日)、大阪歴史博物館共同研究シンポジウム「城下町大阪を考える」(於大阪歴史博物館)が開催された。そこで、平成18年度当館主催シンポジウム「江戸城研究の新視点」第2部「江戸城の経営と消費－ヒト・モノ・カネの出入りから－」の要旨および、本報告第3章の内容を増補改訂した「都市の中の江戸城－労働市場としてみた將軍の城－」を発表した。末筆ながら、その機会を与えてくださった大阪歴史博物館および関係者各位に御礼を申し上げる次第である。